

論文の内容の要旨

論文題目： Sibling Relationships and Social Development among Twins in Early Childhood

(幼児期の双生児におけるきょうだい関係と社会性の発達)

氏名： 野寄 茉莉

序論

幼児期のきょうだい関係の特性として、ポジティブ・ネガティブに関わらず情動が強く表出される、きょうだいで一緒に過ごす時間が親と過ごす時間よりも長く関係が親密である、ペア間での質の違いが大きいという点が挙げられる。また、きょうだい関係は、教える - 教えられるといった階層的なやり取りに代表される「相補性」と、一緒に遊ぶといった同等なやり取りに代表される「互恵性」の2つの要素で構成される (Dunn, 1983)。このようなきょうだい間のやり取りを通じて他者の視点・考え方を想像することによって、幼児期の社会性の発達が促されると考えられている (Dunn, 1983)。年齢差のあるきょうだい (以下、単胎児のきょうだい) を対象とした多くの先行研究で、幼児期のきょうだい関係と社会的適応・社会的理解の発達との関連が明らかにされてきた。

双生児のきょうだいは、単胎児のきょうだいよりもやり取りする時間が多いことが知られている (Thorpe & Danby, 2006)。また、きょうだい間の年齢が近いほど互恵性が強まることから、双生児のきょうだい間のやり取りは互恵性が強いと推測される。これまで、きょうだい関係についてあるいは社会性についての双生児と単胎児との比較は個別に行われてきた。しかし、双生児のきょうだい関係が社会性の発達に及ぼす影響についての検討はほとんど行われていない。

本研究では、定量的なデータにもとづいて、幼児期の双生児のきょうだい関係が社会性の発達に及ぼす影響について明らかにすることを目的とした。

[研究 1] 単胎児のきょうだいと比較した双生児のきょうだい関係が社会的適応に及ぼす影響

研究 1 では、双生児のきょうだいと単胎児のきょうだい双方の母親を対象に質問紙調査を実施し、幼児期のきょうだい関係が社会的適応におよぼす影響について、一卵性双生児(MZ)・二卵性双生児(DZ)・単胎児の共通点・相違点を検討した。

研究に参加したのは、同性双生児 106 組(MZ 58 組, DZ 48 組; 平均年齢 5.24 歳, $SD = .15$)、3 歳～9 歳の間に同性の 2 人の子どもがいる単胎児のきょうだい 86 組(年少者: 平均年齢 4.25 歳, $SD = .77$; 年長者: 平均年齢 6.95 歳, $SD = 1.56$) の母親だった。きょうだい関係については、きょうだい関係質問紙(the Maternal Interview of Sibling Relationships; Stocker et al., 1989) を使用し、きょうだいに対するポジティブさおよびきょうだいに対するネガティブさについて調べた。社会的適応については、強さと困難さ質問紙 (the Strengths and Difficulties Questionnaire; Goodman, 1997) を使用し、向社会的行動・行為問題・仲間関係の問題について調べた。子どもの性別・子どもの年齢・母親の年齢のうち、各項目の得点に有意な影響をおよぼす変数を統制した後、きょうだい関係が社会的適応におよぼす影響について、MZ・DZ・単胎児の 3 グループ間で多母集団パス解析を行った。

分析の結果、3 つのグループで共通していたのは以下の点だった。きょうだいに対するポジティブさが強いほど向社会的行動は増加し、攻撃行動は減少した。また、きょうだいに対するネガティブさが強いほど向社会的行動は減少し、攻撃行動は増加した。しかし、きょうだいに対するポジティブさが向社会的行動および攻撃行動におよぼす影響力の強さについて分析した結果、グループ間で相違点が見られ、MZ と DZ では単胎児のきょうだいよりも影響力が強いことが明らかになった。さらに、仲間関係の問題については、影響の方向性に相違点が見られ、MZ では、きょうだい関係のポジティブさが強いほど仲間関係の問題が増加した。これに対して、DZ と単胎児のきょうだいでは、きょうだい関係のポジティブさが強いほど仲間関係の問題が減少した。

以上の結果から、幼児期の社会的適応の発達において、きょうだい間のやり取りが多いことが重要であることが示唆された。さらに、MZ のきょうだい関係は、DZ や単胎児のきょうだいにおけるきょうだい関係とは異なる意味合いを持つ可能性が示唆された。MZ は DZ に比べてきょうだい間での協力関係が強いことがわかっている (Segal et al., 1996)。MZ では、きょうだい間の親密性が強いことで他者との良好な関係を築くのが難しくなった可能性がある。

[研究 2] 幼児期の双生児のきょうだい関係が社会的認知能力に及ぼす影響

研究 2 では、3 歳の双生児を対象にきょうだい遊び場面の行動観察および社会的認知能力のうについて個別の発達調査を実施し、幼児期の双生児のきょうだい関係が社会的認知能力におよぼす影響について、MZ・DZ の共通点・相違点を検討した。また、先行研究で明らかにされている単胎児のきょうだい関係と社会的認知能力との関連についての結果と双生児を対象とした研

研究2の結果を比較することで、幼児期のきょうだい関係が社会的認知能力に及ぼす影響について総合的に考察した。

研究に参加したのは、同性双生児 111 組(MZ 61 組, DZ 50 組, 平均年齢 3.01 歳, $SD = .04$) だった。調査は参加者の自宅で行われた。きょうだい関係については、おもちゃを使用した自由なきょうだい遊び (7 分間) の様子を録画し、コーディングマニュアルにもとづいて評定を行った。データの一部について複数名による評定を行い、十分な評定者間一致率があることが確認された。社会的認知能力の測定については、3 種類の誤信念課題(Gopnik & Astington, 1988; Perner, Leekam, and Wimmer, 1987; Wimmer & Perner, 1983) および 2 種類の見かけとほんもの課題 (Flavell et al., 1983) を実施し合計得点を算出した。きょうだい関係の各評定項目について因子分析を実施して因子得点を算出した後、きょうだい関係が心の理論課題の能力におよぼす影響について、MZ・DZ の 2 グループ間で多母集団パス解析を行った。

分析の結果、双生児のきょうだい関係は、明確に目的、意図が共有されたやり取り・ポジティブで平等なやり取り・きょうだい間のネガティブさの 3 因子で構成されていた。これら 3 因子のうち、MZ・DZ で共通して、明確に目的、意図が共有されたやり取りは社会的認知能力を高めることがわかった。また、きょうだい間のネガティブさは心の理論の能力に有意な影響を及ぼしていなかった。さらに、MZ でのみ、ポジティブで平等なやり取りが社会的認知能力を高めていた。

以上の結果から、きょうだい間で目的、意図を共有してコミュニケーションを多くとることが、社会的認知能力の発達に重要であることが示唆された。単胎児のきょうだい関係と社会的認知能力との関連についての先行研究では、きょうだい関係のネガティブさと社会的認知能力との間に負の関連があることが示されてきた (Cutting & Dunn, 2006)。しかし、研究2の結果からは、双生児のきょうだい間でのネガティブなやり取りは、単胎児のきょうだいでネガティブなやり取りとは異なり、社会的認知能力に負の影響を及ぼさない可能性が示唆された。さらに、MZ でのみ、きょうだい間のポジティブさを構成するポジティブな情動とふり遊びの間の有意な正の相関、きょうだい間のポジティブさの心の理論の能力への有意な正の影響が見られた。このことから、きょうだい間でポジティブな情動をともなったふり遊びをすることが、双生児の社会的認知能力の発達に重要である可能性が示唆された。

総合考察

研究1・2を通じて、双生児のきょうだい関係は社会性の発達に重要な役割を果たすことが明らかになった。単胎児のきょうだいを対象とした先行研究に本研究の結果が加わることで、幼児期におけるきょうだいの存在の重要性を強調することができた。また、双生児のきょうだいはやり取り (社会的相互作用) の量が多く互惠性が強い (Thorpe & Danby, 2006)。このような特性を持つ双生児を対象とした本研究を通じて、きょうだい間でやり取りを多くすることの重要性を示すことができた。

これまでの双生児研究は、行動遺伝学的研究あるいは医学的・疫学的な発達研究が活発に行わ

れてきたのに対して、双生児の心理発達に関する研究はきわめて少なかった。本研究によって、幼児期の双生児のきょうだい関係が社会性の発達におよぼす影響について実証的で重要な知見が得られた。このことは、双生児研究の分野において新たな領域を開拓できたと考えられる。また、双生児と単胎児のきょうだい関係における共通点・相違点を明らかにすることによって、きょうだいが果たす役割の意義や年齢差のあるきょうだいを持つことの意義について統合的な示唆を得ることが可能となる。この点において、本研究は、きょうだい関係についての発達心理学的研究の進展に寄与すると考えられる。さらに、本研究は、双生児の心理的・社会的発達について基礎的な知見を提供することができ、双生児の養育者に重要な情報となった。

今後の課題として、今回扱えなかった異性双生児も加えた縦断的な調査を継続すること、きょうだい間の相補性と互惠性について双生児と単胎児の比較を定量的に行うことで、発達的な変化や双生児の心理発達についてより総合的な検討を加える必要がある。